

巻頭言

「現場発の協同労働研究」に
どのような意味があるのか？

走井 洋一（東京家政大学教授/協同総研常任理事）

私たちは自分自身のことを内省だけで理解できているように思い込んでいるが、必ずしもよく理解できているわけではない。もし内省によって自身のことをよく理解できているのであれば、自らが意図していない行為を事前にとどめることができるだろうし、それゆえ、後悔も反省もないはずだろう。しかし、現に私たちは後悔もし、反省もしているのだから、内省だけでは私たちは自身のことを理解できないといえるはずである。

それでは、どのようにすれば、私たちは自分自身のことを理解できるのだろうか。現在のカウンセリングの技法の源流の1つには解釈学があるといってよいが、その解釈学を成立させた1人であるW. デルタイは、私たちは表現を通じた理解によってしか自己に至り得ないと述べた。この場合の表現は言語や芸術による表現にとどまらず、制度や文化など私たちの眼前に生じたものすべてを意味する。これらは私たちの生動的（lebendig）な生（Leben）があるタイミングで形となって現れ、固定化されたものである。その瞬間の生が切り取られたものであるといってもよいかもしれない。もちろん、その瞬間の生を表していることはまちがいないが、生そのものを十全に

表しているわけではないから、表現は近似であるとも指摘されている。つまり、近似としての表現を通じてしか私たちは自分自身を知り得ないが、それが瞬間を切り取られた生であることから、不断に自分自身を知り続けていくしかないことを意味している。こうした生→表現→理解→生……という循環を解釈学的循環というが、私たちは不断の解釈学的循環を通じてしか自分自身を理解することができないのである。

ただ、こうした循環は解釈学という範疇を越えて古来指摘されてきたことでもあった。私たちは確かにこのように自らの行為（表現）の意味を捉え（理解）、次の行為を行う。こうして自分自身を形づくってきたし、デルタイの指摘を俟つまでもなく、至極当然のことであったといってもよい。

しかし、価値が多様化し、単一の価値基準によって正しさを判断できなくなってきた社会においては、こうした循環は私たちのアイデンティティを脅かすものとしても作用することとなった。循環の外に何らかの価値基準があれば、その基準に即して循環していくことができるが、基準となるものを見出せなくなると、自分自身で、つまり、循環のなかでその都

度その正しさを判断することを要請されるようになってくるからにほかならない。

さて、かなり迂遠な話を続けてきたが、本号のテーマである「現場発の協同労働研究」(以下「研究」)も、こうした循環における表現として受け取ることが可能である。協同労働は運動であって、生動的なものとして生起している。それゆえ、生動的な運動そのものをそのなかでは理解することが困難であるため、表現を経由することが必要となる。その意味で、「研究」は、実践者が内省によっては至り得ない自分たちの協同労働という実践を理解するための有効な方途となりうるであろう。ただし、一度自分たちの実践を表現すれば終わるということではなく、表現し、理解するというプロセスを不断に経ることが要請されるものでもある。先に解釈学的循環について指摘したが、循環が求められているのは表現が固定されるからにほかならなかった。それゆえ、実践そのものへ遡及するためには、表現と理解の不断の繰り返しが必要なのである。もちろん、団会議等での議論や実践そのものもまた、先に述べたように私たちの眼前に生じたものであるから、表現として受け取ることができるが、それらは流れていきやすいもので、理解の対象とはなりがたい(本来、研究であればそれらを対象とすべきであろうが……)。それゆえに固定するという点で「研究」というプロセスはより実態に近

づくことができるものといってよい。

しかし、こうした「研究」にはいくつかの陥穽がある。第1に、「研究」が言語による切り取りが行われたものであるという点である。言語資源の多寡によって切り取り方が変わるのはもちろんであるが、それだけでなく、第三者の言語によって生動的な運動がより適正に切り取られる場合もあれば、逆に不適正に切り取られる場合もあることに留意する必要がある。特に、私たち研究者には後者の危険性を回避する義務があるだろう。文脈性(文脈性もまた循環のなかで明らかにあるので、研究者も循環に自ら投企することが求められるだろう)を踏まえて理解するというスタンスを持たないまま、自らのフレームに実践を当てはめていくことがないようにする自制が求められることを忘れてはならないだろう。

第2に、価値が多様化した社会における解釈学的循環はアイデンティティを危機に曝すことになることを指摘したが、「研究」において何らかの基準が明確でないと、表現・理解・実践という循環が徐々に思いもよらない方向へと進むことにもなりかねない。そうならないようにするためには、協同労働とは何かという原理的な問いに対する見通しを実践者が持っていることが極めて重要となる。それゆえ、本号で特集された「研究」を契機とし、実践者と研究者が協同して、こうした原理的な問いに向き合っていくことになることを期待している。